

科目名 Course Name		開講年次	開講学期	曜日・時限
金融と証券 Money and Securities Markets		1年	前期	別途、時間割参照
単位数	授業の形態	授業の性格		履修上の制限
2単位	講義	選択 ()		特になし
当該科目の理解を促すために受講しておくことが望まれる科目				
経営学Ⅰ・Ⅱ、ビジネス実務総論、ファイナンシャル・プランニングⅠ・Ⅱ				
同時に履修しておくことが望まれる科目				
経営学Ⅰ、ビジネス実務総論、ファイナンシャル・プランニングⅠ				
担当者に関する情報				
氏名	研究室の場所	オフィスアワー		電話番号・メールアドレス
長江 庸泰	本館2F (研究室1)	月～木曜 9:00～16:00 (授業・会議時間を除く)		授業中に指示します
授業の概要				
<p>まず経済社会における金融の意義を概観した後、金融政策における金融の機能や景気変動と金利、物価、為替の関係を学習する。次いで、金融機関の「種類」と金融資産投資としての金融商品の種類を取り上げる。ファイナンシャルプランナーの資格取得を目指す受講者にとっては、試験科目の内容と重複しているので試験対策としても有意義である。</p>				
授業の目標				
<p>①金融・証券市場における金利・為替・景気の間関係を説明できるようにする。 ②貯蓄型金融商品を理解して投資目的に合った金融商品の説明ができるようにする。 ③債券投資・株式投資の内容と特徴を説明できるようにする。</p>				
授業の方法				
<p>本授業は、講義、マルチメディア授業、デジタルテキスト、プレゼンテーション、ブレインストーミング、サービスマーケティング、ディスカッション、グループワーク等のアクティブラーニングを活用しながら、金融と証券に精通した人材育成を目指すものである。</p>				
学習の成果（学習成果）				
<p>経済社会における景気変動・金利・為替・物価の間関係を学習した上で、投資目的に沿った財形型金融商品の種類をあげて、その内容を説明し、さらに、債券市場と株式市場の特徴と内容を体得した上で投資目的に沿った債券と株式に選択のためのポイントを説明することができる。</p>				
授業のスケジュールと内容				
第1回目	はじめに(シラバスの説明、講義の狙いと進め方、成績評価の説明、受講の態度の説明)/レポート課題説明と出題			
第2回目	社会における経済活動			
第3回目	経済社会における金融の役割			
第4回目	金融市場における金融機関と資金の流れ/(グループワークによるプレゼンとディスカッション①)			
第5回目	経済政策と金融市場			
第6回目	マーケットの変動とその要因①(景気と金利・物価)			

第7回目	マーケットの変動とその要因②（景気と為替）
第8回目	金融機関①（金融機関の役割とその業界）/（グループワークによるプレゼンとディスカッション②）
第9回目	金融機関②（金融機関の種類）
第10回目	金融資産投資①（金融商品投資の予備知識）
第11回目	金融資産投資②（預金）
第12回目	金融資産投資③（株式）
第13回目	金融資産投資⑤（債券）
第14回目	債券投資②（投資信託9/（グループワークによるプレゼンとディスカッション③）
第15回目	ポートフォリオとデリバティブ

成績評価の方法と基準

評価の領域	割合	評価の基準
授業参加態度	10%	以下の3点から評価する：①ノートに関し、創意工夫してまとめられている、②自分の意見を論理的に述べている、③積極的に質疑応答に臨んでいる。S評価の基準：上記参加態度を全て満たすもの。
レポート	30%	Sのレポートの評価：①創意工夫してまとめられている、②自分の意見を論理的に展開している、③課題の本質と学習成果が十分にまとめられている。レポート最新課題は、月1回計3回提出予定（締切は各月末）。
調査報告書		
小テスト	40%	グループワークによるプレゼンテーション力のS評価：①内容が創意工夫した発表となっている、②グループの意見が論理的に述べられている、③グループで協働し、積極的に質疑応答に臨んでいる。
試験		
発表内容（態度含む）	20%	Sのレポート発表評価：①創意工夫した発表となっている、②自分の意見をまとめながら論理的に述べている、③積極的に質疑応答に臨んでいる。
その他		上記評価基準に基づき成績評価：S（傑出した内容）=90-100、A（平均を上回る内容）=80-89、B（平均的内容）=70-79、C（平均を下回る内容）=60-69、D（左記以外の内容）=0-59

教科書と参考図書

長江庸泰作成の“デジタルテキスト[金融・証券論2017年度版]”を活用する。

履修上の留意点・ルール

本学の教育理念(想う人、考える人、行う人を創る)を体現する、「1)常に疑問を持ち、2)物事を多面的に考え抜きながら、3)自分で調べ・学ぶ、課題解決型のアクティブラーニング」を常に心掛けましょう。